

第6回 安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会

1	協議会名	安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会
2	日 時	令和7年5月12日（月） 午後1時30分から3時まで
3	会 場	安曇野市役所本庁舎 3階理事者控室
4	出席者	笹本正治会長、梅干野成央副会長（リモート参加）、曾根原秀明委員、場々洋介委員、幅谷啓子委員、山根宏文委員（リモート参加）、大澤慶哲委員、加藏友美委員、田中洋委員（柳澤亮代理出席）
5	市側出席者	教育部長：洞武志、文化課長：三澤新弥、文化財保護係長：堀久士、文化財保護係：杉本まゆ、山下泰永 支援事業受託者：（株式会社KRCあづみの事業所）環境計画室長 藤村忠志、環境計画室 長尾山音
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人 0人	記者 0人
8	会議概要作成年月日	令和7年7月3日

【発言要旨】

1 開会

2 あいさつ（会長）

3 議事

（1）スケジュール（資料1）

【事務局より説明】

委 員：特に意見等なし

（2）計画書素案について

① 前回会議以降の指摘への対応（資料2、3）

② 第8章、第9章の内容

【事務局より説明】

会長：第8章とその前の章を含めて全体的に事務局から説明があった。本日は第8、9章を議題の中心とするが、時間があれば前の章にも触れたい。時間内で収まらない部分でご指摘があれば、後日事務局に提出いただきたい。

個人的に「安曇野市文化財保存活用地域計画」というこの表題で市民が見てくれるか疑問である。「私たちの宝物を探し、守り、活用し、伝える」というようなサブタイトル等を提案する。そして本案のp3の下に、「本計画を作成し実施することによって、市民、民間団体、文化財部局、庁内関係部局などが地域総がかりで文化財を守る」とあるが、その前に例えば「文化財を探し、見つけ出し、そして位置づける」という表現を入れた方が良いのではと思う。このような形でならば、文化庁の指導にも合致し、私たちの宝物として認識しているものを探し、守り、生かし、伝えていくことがわかりやすくなるのではないかと考える。文化庁の指針で許されないということでなければ、本計画を何のために作るかという再認識にもなるので、是非お考えいただきたい。

委員：とても魅力的な計画書に仕上がってきていると実感している。

本計画案 p141 に「文化財保存活用支援団体」として指定するとあるが、他自治体の地域計画において、それを定めている事例があるのか。

事務局：支援団体は本計画とは別の制度であり、厳密には異なる。本計画案の 50 個の措置の中に、支援団体を今後定めていきたいと記した。本計画作成後、支援団体としての指定の仕組みを作っていきたいと考えている。

委員：本計画において支援団体は措置の一つであると理解した。私は建築に関係した仕事をしているが、建築に関係する組織もおそらくたくさんあると思う。NPO では信州伝統的建造物保存技術研究会や、建築士会を中心としたヘリテージマネージャーという組織もあるので、そのあたりも視野に入れておいていただけると良い。

会長：委員それぞれご活躍の分野にそういうものがあるのではないかな。

委員：p 99 に重要文化財曾根原家住宅の写真が掲載されている。平入りのため東側から撮影されているが、通常のアングルの妻側からの写真がわかりやすいので変更すべきではないかな。

事務局：写真についても細かいことで結構なので、お気づきの点があればご指摘いただきたい。

委員：私も違和感があった。南側の妻面からの方が良い。

会長：写真は見る人ごとに印象が異なるので、ご意見をお願いしたい。文化的景観に合致する写真が少ないように思う。例えば、拾ヶ堰ができたことによって新たにできた堀金新田は、安曇野の風景や歴史を代表する景観になってしかるべきである。今後大事にすべき景観として新田のような写真を入れていただきたい。

委員：p 117 の仏像の写真は、できれば光久寺の日光・月光菩薩の写真が見栄えがするため良いのではと思う。

p 126 のニジマスの養殖について。千曲川にダムができたことにより鮭が遡上できなくなったことに対する補償金と私財を原資として養殖場を運営したという歴史がある。補償金に加え、私財をつぎ込むような志のある倉科多策という人がいて、県も継続せざるを得なかった。そういうストーリーを加えることで、安曇野らしさが出てくるのではないかなと思う。

会長：近代について今のようなことを少し入れていくようにしていただきたい。同様の部分で、「明治時代には鮭やマスを取ることができた」、p 60 には「鮭漁が盛んであった」とあるが、この表記だけでは誤解を招くので、明治時代以前から続いていることを明示した方が良い。

委員：江戸時代には鮭漁で税金を払った記録がある。

会長：穂高郷土資料館にある鮭漁の道具は安曇野市にとって非常に貴重なものである。今後の世代が認識できなくなってしまう恐れがあるので、ぜひ修正していただきたい。

委員：できれば長峰山あたりからの写真をどこかに使ってもらえればよいと思う。三川合流地点などの写真はインパクトがあるのではないかなと思う。

事務局：p 11 にパノラマ写真、p 14 に雲海の写真を用意しており、これらは東山から西山を俯瞰した構図となる。

会長：北アルプスばかりに目がいきがちだが、住人の視点からするとむしろ東側をよく見ているのではないかな。東側の写真があまり入っていないように思う。住んでいる人たちの視点から、そのような写真も入れていただけたら良い。

委員：p 120 の「鮭の遡上」の記述について、ダムは必ずしも地元のために電力が必要だったわけではなく、東京の山手線に電気を送るためというストーリーを入れると、安曇野と東

京のつながりが見えてくるのではないかと思います。

p 108 の関連文化財群 C の「安曇野を拓いた先人」の記述では、拾ヶ堰の記述から登山道への記述へと飛躍が大きいのではと感じる。拾ヶ堰測量に関する古文書が未指定文化財として載っている。小穴喜一先生の検土杖等を含めると、ストーリーになるのではと思う。

同ページの「当市で育まれた学びの気風と学び舎」では、「潮沢地区の山間集落でお寺が勉強の場所として使われた」という記述があるが、p 106 のコラムでは寂しくなってしまった限界集落として、ネガティブな要素でお堂が扱われている。p 115 の地域を見守る仏様一覧に「名九鬼の地藏堂」や「潮沢の堂群」が入っている。これを関連文化財群 C の学び舎として扱うのも一つの選択肢ではないかと思う。

前回会議で計画が綺麗すぎて、引っかかる部分がないという意見があったが、綺麗すぎると私も思っており、先人の苦難で乗り越えてきたものを関連文化財群 C の「多彩な先人の足跡」に入れるのも良いのではないか。

会長：大変重要なご意見である。小穴喜一先生が作られた検土杖による地図は、安曇野最大の宝である。しかし、時間が経ったことにより小穴先生の努力が忘れられてしまっている。そういう内容が本計画に入れられることによって、多くの先人が地域を知るためにどのくらい努力をしてきたのかが見えてくるはずである。できれば小穴先生についても触れていただければと思う。

委員：p 115 の表にある神社本殿はすべて穂高神社から払い下げられた社殿なのか。

事務局：そうではない。

委員：どれが穂高神社からの払い下げかがわかりづらい。

会長：私たちは読みやすくするために言いたいことを言っているので、事務局にはご了解いただきたい。よくこれだけまとめていただいたと思う。皆さんもおそらくそう思っていると思うので、その上で、なおかつよくするために色々な意見をもっと取り入れていただけたらと思う。

委員：今の箇所について、確かに私も違和感を持っている。穂高神社の記述中に穂高神社の払い下げでない本殿が入り込んでいるのは適当でないと思う。場合によって項目を分けるなどしていただいた方が良いと思う。

関連文化財群のそれぞれの項目ごとに第 7 章の 50 個の措置と対応しているので、どうやっていくかが示されていて非常にわかりやすい。文化庁のマニュアルに示された方法なのか。

支援事業者：そこまで明記はされていないが、他の自治体の地域計画をいくつか研究する中で、第 7 章と第 8 章の関係がわかりにくいところがあったので、番号を統一し、関連文化財群で特記しているものはアルファベットをつけて表記した。第 7 章と 8 章を関連付けている例は他自治体でもあった。

委員：第 7 章で示されている措置がどの関連文化財群で、どういうことをやるかが非常にわかりやすく示されていると思う。一方で、これに対応するように第 7 章の 50 個の措置にも、どの関連文化財群に対応しているかを併せて示しておくといよい。関連文化財群は安曇野の具体的なフィールドを示していると思うので、それぞれの措置が具体的にどこで重点的に進められるのかがわかりやすいのではないかと思った。

会長：p 98 の図の色を検討し、はっきりとわかるようにしていただきたい。全体的に同じような色になっている。注目すべき民家は他の民家と色を分けてわかりやすくしていただきたい。

p 100 のコラムに「古民家活用の新たな動き」が記述されており、協定の締結時の写真も掲載されているが、何なのかがよくわからない。文章を読んでも「事業化に向けた詳細協議を行うための協定を締結しました」と書いてあるが、よくわからないという感想を持った。p 107 の表中に平仮名で「さとぶろ」という言葉が出てくるが、「さとぶろ」と言われてもよくわからない。ある程度わかるような言葉に修正していただいた方が良いのではないと思う。同様に p 114 で、「木戸の暮らしを見守る神様」とあるが、「木戸」が当たり前の言葉のように書かれている。普通ならば道祖神は集落の入口に置かれているが、そこに木戸があるとは限らない。集落の入り口で人々の暮らしを見守るという一般的な言葉に変えた方が良いと思う。木戸という言葉は p 120 にも出てくるが、修正していただきたいと思う。集落の入口に必ずしも木戸があるわけではない。

委員：集落内のある一定のまとまりがあるところを木戸と呼ぶ概念がある。本計画案に記載されているように、日常的な付き合いのあるまとまりを木戸と呼び、木戸ごとに庚申講がある。

会長：同じ松本平でも、「〇〇耕地」と呼ぶところもある。木戸というのは江戸時代町に設置された（物理的な）木戸というのが一般的な概念である。新住民や若い人も多くなっているので、普通の人を読んで、ある程度わかるようにした方が良い。今のものを使うならば説明を入れてほしい。

委員：木戸は死語になりつつある。今まで家がなかったところに家ができたため、木戸という概念が消滅しつつある。その範囲のつきあいや庚申講もなくなったので、理解できない人が多い。

会長：木戸はこの地域の特徴を示すので、「〇〇耕地や〇〇組という言葉と同様である」等の補足説明をし、わかるようにしていただいた方が良い。

事務局：隣組のような小さな集落の単位のつもりである。

委員：江戸時代から昭和 30 年代まで続いていたが、40 年代になって住宅が増え、木戸の概念は薄れていった。

会長：古文書等にも「木戸」の概念、記述は出てくるのか。松本藩に出す場合に村の下位組織的に木戸という単位があるのか。

委員：出てこない。日常生活のレベルでの呼び名であり、習わし的な範囲である。

委員：このような計画には予算等のお金の話が出てくると思うが、本計画では予算的なことには触れないのか。それぞれの活動、措置にいくらかかるのかは一切書かれていないが。

会長：事務局へ確認する。

事務局：本計画は文化財行政の根幹となるものであり、この計画を元にそれぞれのプロジェクトを走らせる段階で予算化していく。予算を算出するための元となる計画とお考えいただきたい。

委員：そういう理解をしているが、この計画では、果てしなく金額が積み上がると思う。このような計画が頓挫する原因のほとんどは、お金が足りなくなってしまうこと。だいたい何

億ぐらいのことをやりましょうという感覚はないのか。

事務局：本計画はそこまで踏み込むものではない。

委員：その都度、議会を通すというイメージか。特に問題ないが、興味があったので聞いた。

委員：国からの財源もあるのか。

事務局：第7章の措置の一覧をご覧くださいと、右側半分に「財源」の欄がある。例えば、措置の16番の財源の欄には「市」と記載してあるが、これは、主に市の財源を使って実施するという意味。措置の21番「修復等の補助」では財源の欄に「国」と記載されている。これは、国の指定文化財ならば、国による補助金交付制度があるので、国の財源も活用しながら21番を進めていくという見方をしていただきたい。

委員：おそらく、パブリックコメントではこのような事業にいくらかけるのかという話もでくるだろう。

会長：本計画はこういう方向に持っていきましょうという大枠を決めるものであり、具体的な予算を記すものではない。いわば、憲法のようなものとお考えいただきたい。

委員：文化的景観について。安曇野にとって非常に大事なことであると思う。自分は安曇野市の都市計画審議会の委員でもあるが、現状では条例に違反しなければよしとみなして開発が進んでいる。第9章の取組主体と推進体制の都市計画課の欄に、「文化的景観を守る」などの文言を入れていただきたい。例えば、私の故郷の松江城は高いところに天守閣がありながら、同じ高さのマンションが建ってしまった。これは条例に違反していなかったために建てられてしまい、手遅れになってしまった。文化的景観を守るためには、都市計画で条例に組み込むことが必要である。

これからの観光において、施設を活かすことが大事であり、活かし方を考えていかなければならない。安曇野市の観光ビジョン推進委員会の会長を務めているが、この報告書は非常に素晴らしいもので、観光で活かすことができてありがたい。以前にもお話したが50年前の『an・an』と『non-no』では、18～25歳をターゲットとして、安曇野の特集が組まれていた。特集では「安曇族」、方言の「～ずら」は静岡と同じであること、古民家や等々力家、なまこ壁、井口喜源治、扇状地、わさび田のボプラとアカシア、碌山美術館のグズベリーハウスや横山拓衛のこと等が書かれていた。まさに文化観光のはしりだったと思う。私が旅行業社にいた頃は、その中の一部分のみを切り取ってしまい、歴史やストーリーなしにツアーを作ってきたことを反省している。安曇野の観光では文化的観光を重点的に進め、安曇野を魅力的にしていきたい。安曇野にくりピーターは60、70代の元アンノン族の世代であり、その方々に『an・an』、『non-no』が伝えていた文化的観光を、本計画を活かして進めていかなければならないと思った。

会長：この計画は非常に出来が良いので、様々な場所で使ってもらえるようにしたい。写真も非常に良いものが入っているので、さらにブラッシュアップしていきたい。

長野県内で重要文化的景観に選定されているのは、姨捨の棚田と飯山の小菅の集落である。小菅は今年選定されて10年が経過した。中南信には重要文化的景観がない。安曇野市も選定されるよう、委員の皆様にもご協力いただき、少しでもよい形で風景を残していきたい。景観を残さなければ安曇野の価値はなくなってしまうので、本計画の中にも大きく謳われているように、皆で努力していきたいと思う。

8, 9章の以外についてもご意見いただきたい。

委員：細かいことだが、p 32 の指定等文化財の一覧表について、並び順を統一していただきたい。p 70 の地域の宝物についての一覧表についても同様である。

会長：事務局で整理していただきたい。

委員：第7章の50個の措置の一覧表の「取組主体」について。本計画の根幹に関わると思うが、例えば方針2の「地域の宝物」を守ったり、親しんだりする取組主体において、ほとんど行政の欄に◎が付いている。本計画は地域皆で取り組むべきものであり、行政に◎がついていると、「行政でやってくれる」という姿勢になってしまうのではないかと思う。行政以外に◎を増やしたり、あるいは◎をそぎ落としていくことが必要である。この方針2については専門家に頼ることも大事だが、「専門家」の欄に◎がない。行政は本計画をしっかりと運用する側で、推進していくのは地域の人や専門家だという構図を作ることが大事である。

会長：取組主体に「行政」ばかりが出てくるが、「実際に実行していくのは誰か」、「税金を払っているのは誰か」という視点を考えると、◎を少しでも増やし、皆の責任であるということを確認すべきである。少なくとも地域の文化財を探ったり、保存していくのは市民であるということがわかるような計画にしていなければならないと思う。

p 25 の中世の記述の「安曇筑摩両軍の武士たちは上田市の生島足島神社で忠誠を誓い、その起請文が同社に残されています」という部分で、主語主体は誰なのか。信玄へ忠誠を誓ったことを明確にした方がよい。また上田市は現在の地名であるため、現上田市とした方がよいのではないか。

p 56 の下から5行目「武田信玄らの南からの侵攻に備えるため、山城が築かれた」とあるが、この記述では山城は外部からの侵攻を防ぐのみになってしまう。地域内の戦乱に備えたのが元々であり、その後信玄が来たのであり、「地域内の戦乱や外部からの侵略に備えるため」という説明を加えた方がわかりやすいのではないかと思う。

p 60 の養蚕と生活の変化で「花柳界として繁栄しました。」で終わっているが、「しながら養蚕の衰退と共に…」とその後の部分を入れておかないと、正しく理解されないのではないか。

p 61 の「トンネルや橋梁は地元工場で生産されたレンガによって作られていました」というのはどこのことなのか。

事務局：明科地域。

会長：ぜひそれを入れてほしい。レンガ製造についてほとんど知られていないので。

p 82 に「学校ミュージアムや博物館で主催する親子体験等は…」とあるが、安曇野市がいかに子どもたちの感受性や文化を育てるために努力しているかを示すことが重要である。例えば、安曇野明科の薪能で、子どもたちに能楽教室を毎年実施していることが良い例である。このような具体例を挙げることによって、市民も我々がやっていることがそのような中に位置しているとわかってもらえるのではないかと思う。

委員：個人的な質問だが、曾根原住宅では天蚕をやっていたのか。p 60 の天蚕の記述にかかる写真が曾根原家住宅になっている。本棟造りの家の特徴からの推測ではないか。例えば、住宅復元した際にそういう痕跡が見られたとかなら良いと思うが、私の認識では天蚕をや

っていたという話は聞いたことがない。不確実なのであれば確実なコンテンツのほうがよいと思う。

会長：天蚕そのものは安曇野として非常に重要な文化であるが、曾根原家が天蚕によって裕福だったかのような読み方を取られないようにしていただきたい。

(3) その他

【事務局より今後のスケジュールについて説明】

：5月14日までに意見や修正点を事務局に提出いただくよう依頼。

会長：少しでも良いものにしていきたいと思うので、ご協力いただきたい。協議会は最終的には第7回まであるので、ご協力いただきたい。

7月5日から長野県立歴史館の企画展で安曇野展を行う。その目玉として光久寺の日光月光菩薩立像を展示するので、見ていただきたい。

事務局：パブリックコメントを開始したら、委員の皆様は所属各団体の皆さんに宣伝していただければありがたい。

会長：私たちのやっていることをいかに市民に理解してもらい、なおかつ感動してもらえるか。地元、周りにお声がけいただいて、意図を伝えていただければ幸いである。写真も多く、これを見るだけでも安曇野市の豊かさがわかるため、意見をいただきたいとお声がけしていただきたい。